

FDの側面からみた「未来からの留学生」の意義

—参加した教職員へのアンケート調査から—

高木 由美子・岡田 知也・野崎 武司・日野 陽子・小方 朋子・米村 耕平・
(理科教育講座) (音楽教育講座) (保健体育教育講座) (美術教育講座) (特別支援教育講座) (保健体育教育講座)
大久保 智生・久保 直人・山本 木ノ実
(学校教育講座) (学校教育講座) (学校教育講座)

760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部

A Significance of “Mirai karano Ryugakusei” for faculty Development : Investigation of Staff Consciousness about their Motivation to Participate

Yumiko Takagi, Tomoya Okada, Takeshi Nozaki, Yoko Hino, Tomoko Ogata,
Kohei Yonemura, Tomoo Ookubo, Naoto Kubo and Konomi Yamamoto

Faculty of Education, Kagawa University, 1-1, Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522

要 旨 香川大学教育学部が主催している「未来からの留学生」において、教員のFDという側面から「未来からの留学生」がどのような役割を果たすことができているのかという点についてアンケート調査を実施した。その結果、目的に賛同して未来からの留学生に参加・協力している教員ほど、企画内容に対する高い満足度を示す傾向が見られ、他の教員や学生との関係が向上していることが明らかとなった。

キーワード 地域貢献 実地教育 教員のFD 意識調査

1. はじめに

現行の学習指導要領は平成10年から11年にかけて改訂され、学校週5日制の完全実施と併せて小・中学校は平成14(2002)年度から、高等学校は15年度から実施された。その目的は学校、家庭、地域社会の役割を明確にし、それぞれが協力して豊かな社会体験や自然体験等の様々な活動の機会を子どもたちに提供することによって、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動する資質や能力、自らを律しつつ他人を思いやる心やたくましく生きるための体力などの「生きる力」を育むことにある。「未来からの留学生 教育学部フェスティバル in 香大」

(以下「未来からの留学生」)は休日にキャンパスを開放し、「未来からの留学生」として講座に参加する幼児・児童・生徒に、大学という「学び」の場において学習や研究活動を体験してもらう行事である¹⁾。

「未来からの留学生」は、第1回を開催した2002年度から一貫して、教員有志により組織された実施専門委員会が企画立案し、それに基づき学務委員会を通じて各コース・領域から選出された実施委員の協力を得て、ボランティア学生とともに企画運営・実施するという体制をとっている。(論文末尾に注記) 第2回が9月23日に開催されたのを除き、例年10月上旬に開催しており、昨年度(平成20年度)は10月12日

(日)に第7回を開催した。

2. 「未来からの留学生」を開催する意義

「未来からの留学生」は、2002年度は、本学附属学校園の園児・児童・生徒を対象に実施した。2003年度より、ひろく一般にも対象を広げて参加者募集をはじめた。本行事を企画・実施する目的について以下3点にまとめる。

第一は地域貢献である。地域に貢献し、地域と共に発展する大学及び学部としては、子どもたちのために、知的に楽しみ、学習する機会を提供していくことが使命であるといえる。教育学部には多様な専門領域の教員がおり、様々な分野での学びの機会を提供することが可能であろう。

第二は教育学部生・大学院生に、子どもたちとの接点を様々な形で持ってほしいという願いからである。学部4年間のカリキュラムを通して、「附属学校・園における教育実習」は学部学生共通の重要な体験活動である。そして、子どもたちと「学び」、「気づき」、「体験」等を通して関わるといふ点においては「未来からの留学生」にも共通した学びの価値があると思われる。「未来からの留学生」に関わった経験が学部生・大学院生にとって将来、豊かな人格形成と将来の地域社会を支える人材育成のためのかけがえない財産となるであろうと考えている。

第三は教員のFD（ファカルティ・デベロップメント）に関連して、教育学部の教員が子どもの学びを支援するという視点を共有するためである。教員が専門の研究を活かして、教材開発や教育方法改善へと繋げるためには、子どもたちとの交流が不可欠であろう。子どもたちをキャンパスに招き、講座を担当する。そのことが子どもの学びへの関心を高め、ひいては教育学部の教員としての力量を形成することになると考えている。

3. 「未来からの留学生」の実施および効果の検証

「未来からの留学生」は、モノを作ったり、

身体を動かしたり、講義や実験を体験したりする定員制の事前申込型講座と、展示等事前の申込が必要でない自由参加型講座の2タイプを開講している。更にオープンキャンパス、特別講演、特別企画などを併設している。

講座は、全てのコース・領域が、最低1つの講座あるいは企画参加を計画している。以下のその開講数の年度ごとの推移を示した。

Table 1 開講講座数の推移

年度 講座	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008
事前申込型 講座	15	26	23	22	25	15	23
自由参加型 講座	3	10	21	18	16	23	13
計	18	36	44	40	41	38	36

高校生のためのオープンキャンパスは、平成15年度より年に2度以上実施することになった。高校生に教育学部の魅力と活動の一端をアピールするためには「未来からの留学生」は、絶好の機会であることから、オープンキャンパスを同日に実施することになった。オープンキャンパスは、8月にも実施しており、カリキュラムの説明などを行っている。もう一つの大学生の活動を知ることのできるオープンキャンパスとして、香川大学教育学部で主催している行事に高校生が参加し、子どもたちの歓声があふれている様子に接し、教育実践の現場を体験することにより、一人でも多くの高校生が「香川大学教育学部で教員を目指し学んでみたい」と思ってもらえれば幸いである。

特別講演は、平成17年度から附属教育実践総合センターと共催で実施している。平成20年度は平成19年度に続いて、公立中学校教諭藤籠登志美先生による講演であった。平成20年度の昼休みのコンサートは香川大学吹奏楽団に依頼した。2008年4月に開館した香川大学博物館にも当日開館して頂き、「夢化学21-in香大」というタイトルで博物館他外部団体支援の同時開催イベントを実施した。また、特別支援教室と美術領域学生が担当し、ちびっ子教室に参加してい

る支援が必要な児童を大学に招き、学生がケアをしながら講座を楽しんでもらう企画を実施した。

行事の実施効果の検証は、当初より参加者のアンケートを元に検討を重ねてきた。平成20年度も事前申込型講座・自由参加型講座に参加した幼児・児童・生徒及び保護者を対象にアンケートを実施した(回収数519)。その結果によれば、講座に参加して満足しているという回答は9割を超えていることがわかった。また、「毎年楽しみにしています」といったリピーターも年ごとに増加していることがわかっている²⁾。

平成19年度は、学部生・大学院生の実地教育という側面において、「未来からの留学生」がどのような役割を果たすことができているのかという点について、学部生・大学院生がどのような意識をもって関わっているのかという視点から調査を実施し、分析・考察を行った^{2,3)}。その結果、自律性の高い動機づけに基づいて「未来からの留学生」に参加している学生ほど満足し、次回の企画への参加の意欲も高く、子どもとうまく接する自信を持ち、自身の成長を実感しており、子どもや教育への関心も高まっていることが明らかとなった³⁾。

現代の教育現場では、教育環境を取り巻く社会の変化や諸課題に対応できる高度な専門性と豊かな人間性、社会性を備えた、力量ある教員の育成をすることが不可欠であり、教育学部教員はそれを担うことが求められている。本行事はその目的のひとつにファカルティ・デベロップメント及びスタッフデベロップメント(教職員の職能開発, FD・SD)を掲げている。本行事は、教育学部の教員が子どもの学びを支援するという視点を共有し、教員が専門の研究を活かして、教材開発や教育方法改善へと繋げるために、子どもたちとの交流を通じて子どもの学びへの関心を高める機会になると考えている。そして活動に積極的に参加することにより、教育学部の教員としての力量が形成される一助になると位置づけている。

さらに、文部科学省は、社会の信頼に応える学士課程教育を実現するためには、人材養成目

的の明確化や教育内容・方法の改善、成績評価の厳格化、FD・SDなど、教育の質向上に向けた取り組みが必要不可欠であると述べている。また、中央教育審議会大学分科会では「学士課程教育の再構築に向けて」について審議が進められており、「教育再生会議第二次報告」や「経済財政改革の基本方針2007」、「イノベーション25」など、政府諸会議からの多くの提言等において、教育の質向上に向けた取組や必要性が指摘されている。すなわち、FD・SDや、教職員の力量形成に対する関心は高まっている⁴⁾。

本行事に対する実施体制は7年目を迎えて整いつつあり、会を円滑に運営するために参加教員からは十分な協力が得られている。そこで、平成20年度「未来からの留学生」終了後に教育学部教授会構成員に対して「未来からの留学生」の教員に対する影響を、1) 子どもたちとふれ合う機会がもてたか、2) 講座に携わる前と後で教育学部の教員が子どもの学びに対する支援を行うことに対する意識はどのように変わったかと、いう視点より、以下のアンケート項目に回答してもらうことにした。質問項目は以下の9点である。

- ① 参加・協力の動機
- ② 参加・協力による満足感
- ③ 別企画への協力意欲
- ④ 子どもへの関心の向上
- ⑤ 次年度担当の意思
- ⑥ 教育方法改善の可能性
- ⑦ 他の教員との関係の向上
- ⑧ 学生との関係の向上
- ⑨ 職員との関係の向上

アンケート結果を考察する過程において、1) 7年間でえられた教育的成果、2) 今後の同様の行事、FD活動一般を効果的に実施するために必要な要因は何か、について明らかにすることをめざして調査・分析していくことにした。

4. アンケート調査の方法及び結果と考察

(1) 方法

1) 調査対象者と調査時期

調査に協力した教育学部教員31名のうち、未来からの留学生に参加・協力したことのある教員28名を調査対象者とした。なお、調査時期は2009年1月であり、教授会前に配布し、その後回収した⁵⁾。

2) 調査内容

① 参加・協力の動機

未来からの留学生に参加・協力したことのある教員3名にインタビューを行い、参加・協力の動機尺度を13項目作成した。「未来からの留学生に参加・協力してくれた理由についてお尋ねします」という設問に対して、さきに作成した参加・協力することへの動機尺度に「あてはまらない」(1点)から「あてはまる」(5点)までの5件法で回答してもらった。

② 参加・協力による満足感

「未来からの留学生に参加・協力して満足しましたか」という設問に対して、参加・協力による満足感について「満足していない」(1点)から「満足している」(5点)までの5件法で回答してもらった。

③ 別企画への協力意欲

「未来からの留学生のような別の企画があったら参加・協力したいですか」という設問に対して、別企画への協力意欲について「したくない」(1点)から「したい」(5点)までの5件法で回答してもらった。

④ 子どもへの関心の向上

「未来からの留学生に参加・協力して子どもへの関心が高まりましたか」という設問に対して、子どもへの関心の向上について「高まらなかった」(1点)から「高まった」(5点)までの5件法で回答してもらった。

⑤ 次年度担当の意思

「未来からの留学生において講座を来年以降も担当してもいいと思いますか」という設問に対して、次年度担当の意思について「思わない」(1点)から「思う」(5点)までの5件法で回答してもらった。

⑥ 教育方法改善の可能性

「未来からの留学生に参加・協力によって教育方法の改善に生かせると思いますか」という設問に対して、教育方法改善の可能性について「思わない」(1点)から「思う」(5点)までの5件法で回答してもらった。

⑦ 他の教員との関係の向上

「未来からの留学生に参加・協力して他の教員と話す機会が増えましたか」という設問に対して、他の教員との関係の向上について「増えなかった」(1点)から「増えた」(5点)までの5件法で回答してもらった。

⑧ 学生との関係の向上

「未来からの留学生に参加・協力して学生と話す機会が増えましたか」という設問に対して、他の学生との関係の向上について「増えなかった」(1点)から「増えた」(5点)までの5件法で回答してもらった。

⑨ 職員との関係の向上

「未来からの留学生に参加・協力して教員以外の職員と話す機会が増えましたか」という設問に対して、職員との関係の向上について「増えなかった」(1点)から「増えた」(5点)までの5件法で回答してもらった。

(2) 結果と考察

1) 教員の参加・協力の動機

教員の参加・協力の動機尺度13項目に対して、因子分析(最尤法, Promax回転)を行った。その結果、3因子9項目が妥当であると考えられた(Table 1)。第1因子は、「地域貢献になるから」「未来からの留学生の意義に賛同するから」など、地域貢献という未来からの留学生の目的を表す項目からなっているので、「目的への賛同」と解釈した。第2因子は、「時間的余裕があったから」「イベントが好きだったから」など、ゆとりがあることを表す項目からなっているので、「ゆとりからくる協力」と解釈した。第3因子は、「他の教員に頼まれたから」「講座内の担当だから」など、仕方なしに参加・協力していることを表す項目からなっているので、「義務の履行」と解釈した。

尺度の信頼性を検討するため、Cronbachの

Table 1 教員の参加・協力への動機尺度の因子分析結果

〈項目〉	因子 負 荷 量		
	I	II	III
I 目的への賛同 ($\alpha=.773$)			
地域貢献になるから	.997	.008	.030
未来からの留学生の意義に賛同するから	.814	-.033	.022
学生に子どもと関われる機会を提供できるから	.640	.092	.092
地域などから要請があったから	.461		
自分の専門をいかした協力ができるから	.358	-.045	-.074
II ゆとりからくる協力 ($\alpha=.771$)			
時間的余裕があったから	.003	.785	.062
イベントが好きだから	.272	.778	-.130
III 義務の履行 ($\alpha=.781$)			
他の教員に頼まれたから	-.173	-.029	.935
講座内での担当だから	.184	-.065	.694
	因子間相関	I	II
	II	.170	
	III	-.454	-.257

α 係数を算出したところ、第1因子が0.773、第2因子が0.771、第3因子が0.781であった。したがって、内的整合性の観点からの信頼性はあまり高くないものの一応確認された。そして、各因子に含まれる項目の得点の合計を項目数で割り、それぞれ「目的への賛同」得点、「ゆとりからくる協力」得点、「義務の履行」得点とした。

教員の「未来からの留学生」への参加・協力の動機について検討するため、参加・協力の

Table 2 教員の参加・協力への動機尺度の平均値と標準偏差

	平均値	標準偏差
目的への賛同	3.200	0.962
ゆとりからくる協力	1.885	0.993
義務の履行	3.308	1.350

動機尺度の平均と標準偏差を算出した (Table 2)。その結果、未来からの留学生に参加・協力した教員は「目的への賛同」得点と「義務の履行」得点の平均が3点台であったが、「ゆとりからくる協力」得点の平均が1点台と低かった。したがって、参加・協力した教員は、時間的余裕があるなどのゆとりがあって協力しているわけではないことが示唆された。

2) 未来からの留学生参加・協力による影響

未来からの留学生への参加・協力による教員への影響について検討するため、今回用いた尺度の度数分布と平均および標準偏差を算出した。その結果、未来からの留学生への「参加・協力による満足感」では、「満足している」と「どちらかという満足している」と答えている教員が約70%を占め、平均も3.71と高い値と

Table 3 参加・協力による満足感の度数分布と平均値および標準偏差

	満足していない	どちらかという満足していない	どちらともいえない	どちらかという満足している	満足している	平均値 (標準偏差)
未来からの留学生に参加・協力して満足しましたか	2	3	4	11	8	3.71
	7.1%	10.7%	14.3%	39.3%	28.6%	(1.213)

下段はパーセント

Table 4 別企画への協力意欲の度数分布と平均値および標準偏差

	したくない	どちらかという したくない	どちらとも いえない	どちらかという したい	したい	平均値 (標準偏差)
未来からの留学生のよう な別の企画があったら参 加・協力したいですか	4 14.3%	2 7.1%	1 57.1%	63 10.7%	3 10.7%	2.96 (1.105)

下段はパーセント

Table 5 子どもへの関心の向上の度数分布と平均値および標準偏差

	高まらな かった	どちらかという 高まらなかった	どちらとも いえない	どちらかという 高まった	高まった	平均値 (標準偏差)
未来からの留学生に参加・ 協力して子どもへの関心 が高まりましたか	5 17.9%	2 7.1%	1 42.9%	26 21.4%	3 10.7%	3.00 (0.859)

下段はパーセント

Table 6 次年度担当の意思の度数分布と平均値および標準偏差

	思わない	どちらかという 思わない	どちらとも いえない	どちらかという 思う	思う	平均値 (標準偏差)
未来からの留学生におい て講座を来年度以降担当 してもいいと思いますか	1 3.6%	4 14.3%	6 21.4%	3 10.7%	14 45.2%	3.89 (1.286)

下段はパーセント

Table 7 教育方法改善の可能性の度数分布と平均値および標準偏差

	思わない	どちらかという 思わない	どちらとも いえない	どちらかという 思う	思う	平均値 (標準偏差)
未来からの留学生に参加・ 協力によって教育方法の改 善に生かせると思いますか	5 17.9%	3 10.7%	7 25.0%	11 39.3%	2 7.1%	3.07 (1.245)

下段はパーセント

なった (Table 3)。「別企画への協力意欲」では、「どちらともいえない」と答えている教員が約60%を占め、平均も2.96とほぼ中央値となった (Table 4)。「子どもへの関心の向上」では、「どちらともいえない」と答えている教員が約40%を占め、平均も3.00と中央値となった (Table 5)。「次年度担当の意思」では、「思う」と答えている教員が約40%を占め、平均も3.89と高い値となった (Table 6)。「教育方法改善の可能性」では、「どちらともいえない」と答えている教員が約25%しか占めていなかっ

たが、平均は3.07とほぼ中央値となった (Table 7)。「他の教員との関係の向上」では、「どちらともいえない」と答えている教員が約40%を占め、平均も2.93とほぼ中央値となった (Table 8)。「学生との関係の向上」では、「増えた」と「どちらかという増えた」と答えている教員が約50%を占め、平均も3.54と高い値となった (Table 9)。「職員との関係の向上」では、「どちらともいえない」と答えている教員が約40%を占め、平均も2.75とほぼ中央値となった (Table 10)。

Table 8 他の教員との関係の向上の度数分布と平均値および標準偏差

	増えなかった	どちらかという 増えなかった	どちらとも いえない	どちらかという 増えた	増えた	平均値 (標準偏差)
未来からの留学生に参加・協力して他の教員と話す機会が増えましたか	6 21.4%	2 7.1%	1 39.3%	16 21.4%	3 10.7%	2.93 (1.274)

下段はパーセント

Table 9 学生との関係の向上の度数分布と平均値および標準偏差

	増えなかった	どちらかという 増えなかった	どちらとも いえない	どちらかという 増えた	増えた	平均値 (標準偏差)
未来からの留学生に参加・協力して学生と話す機会が増えましたか	3 10.7%	2 7.1%	9 32.1%	5 17.9%	9 32.1%	3.54 (1.319)

下段はパーセント

Table 10 学生との関係の向上の度数分布と平均値および標準偏差

	増えなかった	どちらかという 増えなかった	どちらとも いえない	どちらかという 増えた	増えた	平均値 (標準偏差)
未来からの留学生に参加・協力して教員以外の職員と話す機会が増えましたか	7 25.0%	2 7.1%	1 46.4%	33 10.7%	3 10.7%	2.75 (1.266)

下段はパーセント

Table 11 重回帰分析の結果

	参加・協力による満足感	別企画への協力意欲	子どもへの関心の向上	次年度担当の意思	教育方法改善の可能性	他の教員との関係の向上	学生との関係の向上	職員との関係の向上	他の教員との関係の向上	学生との関係の向上
目的への賛同	.448*	.527**	.597**	.263	.618***	.656**	.830***	.406	.656**	.830***
ゆとりからくる協力	.292	.254	.262†	-.173	.231	.156	.032	.307	.156	.032
義務の履行	.052*	-.088	-.058	-.079	-.146	.270	.103	.163	.270	.103
重相関係数	.599*	.714**	.769***	.279	.818***	.653**	.804***	.538	.653**	.804***

†p<.1 *p<.05 **p<.01 ***p<.001

以上の結果から、参加・協力した教員は企画に満足しており、次年度も担当してもいいと思っていることが明らかとなった。ただし、参加・協力した教員は未来からの留学生とは別の企画へ協力する意欲が特にあるわけではなく、参加・協力したことによって子どもへの関心が特に向上したわけでもないことも明らかとなった。また、参加・協力することによって教育方法の改善の可能性につながるかどうかはさらなる分析が必要である。未来からの留学生への参加・協力が教員の人間関係に及ぼす影響につい

ては、教員同士の関係向上にはあまり役立ってはならず、職員との関係の形成には役立っていないが、学生との関係の形成には役立っていることが示唆された。

3) 参加・協力の動機が及ぼす影響

どのような動機に基づいて参加・協力すると効果があるのかを検討するため、参加・協力の動機を説明変数とし、「参加・協力による満足感」、「別企画への協力意欲」、「子どもへの関心の向上」、「教育方法改善の可能性」、「他の教員

との関係の向上」, 「学生との関係の向上」を目的変数とした重回帰分析を行った (Table 11)。

その結果, 「参加・協力による満足感」($\beta = .448, p < .05$), 「別企画への協力意欲」($\beta = .527, p < .01$), 「教育方法改善の可能性」($\beta = .618, p < .001$), 「他の教員との関係の向上」($\beta = .656, p < .01$), 「学生との関係の向上」($\beta = .830, p < .001$) に対しては「目的への賛同」が影響を及ぼしていた。また, 「子どもへの関心の向上」に対しては, 「目的への賛同」($\beta = .597, p < .01$) と「ゆとりからくる協力」($\beta = .262, p < .1$) が影響を及ぼしていた。「次年度担当の意思」, 「職員との関係の向上」については重相関係数が有意ではなかった。

以上の結果から, 目的に賛同して未来からの留学生に参加・協力している教員ほど満足し, 別の企画への協力の意欲も高く, 子どもへの関心も増し, 教育方法改善の可能性も感じており, 他の教員や学生との関係も向上していることが明らかとなった。

5. おわりに

「未来からの留学生」の教員に対する影響を, 1) 子どもたちとふれ合う機会がもてたか。2) 講座に携わる前と後で教育学部の教員が子どもの学びに対する支援を行うことに対する意識はどのように変わったかという視点より, アンケート項目に回答してもらい, アンケート結果を考察する過程において, 1) 7年間でえられた教育的成果 2) 今後の同様の行事, FD活動一般を効果的に実施するために必要な要因は何か, について明らかにすることをめざして調査・分析を行った。その結果, 回答者は子どもたちとふれ合う機会を十分持つことが出来, 目的に賛同して未来からの留学生に参加・協力している教員ほど高い満足度を示す傾向が見られ, 他の教員や学生との関係も向上していることが明らかとなった。しかし, 意識がどのように変わったかを明らかにするために十分な解析ができるほど, 回収数が集まらず, 自由記述がそれほど多くなかったために, 教育的成果や,

今後の同様の行事に対する意識調査などが不十分な結果となった。今後, 地域貢献に対する未来からの留学生の効果を検証していくとともに, 今より, より多くの教員にとって効果的な行事運営について分析検討していきたいと考えている。

引用文献

- 1) 山神眞一・野崎武司・岡田知也・小方朋子「教育学部FDと学生の实地指導を企図した学部-附属連携事業の試み- 未来からの留学生、一日体験入学を通して-」『香川大学教育実践総合研究 2003, 6, p25.
- 2) 高木由美子「未来からの留学生」報告書2008。
- 3) 岡田知也, 野崎武司, 高木由美子, 日野陽子, 山田貴志, 米村耕平, 大久保智生, 久保直人, 山本木ノ実, 「实地教育の側面からみた「未来からの留学生」の意義-参加の動機づけに関する学生の意識調査から-」『香川大学教育実践総合研究 2008, 16, p133.
- 4) 文部科学省 2008年度報道資料 (2008.06.06)。
- 5) アンケートは教授会参加者の全員に対して用紙の配付を行い, 会終了後の回収及び1週間のメールボックスへの回収箱の設置を行った。

(注記) 第7回「未来からの留学生」の実施組織は以下の通りである。

〈実施専門委員会〉

高木由美子 (委員長), 岡田知也 (副委員長), 野崎武司, 小方朋子, 日野陽子, 米村耕平, 大久保智生, 久保直人 (アドバイザー), 山本木ノ実 (アドバイザー)

入試専門委員会は, 当日にオープンキャンパスを同時開催 (石川 徹)

〈準備委員会〉

実施専門委員会委員, 瀬戸事務長補佐, 田中総務係長, 大麻学務係長

〈実施委員会〉

新見 治学部長, 実施専門委員会委員, 各コース・領域から選出された教員, 講座を担当する教員, 平尾康廣事務長, 瀬戸修一事務長補佐をはじめ事務職員, 教務職員